

新実在論とマルクス・ガブリエル —世界の不在と「事実存在」の問題—

中島 新

はじめに

本稿の目的は、マルクス・ガブリエルが現在論じている「新実在論」がどのような思想展開として位置づけられるのかを検討し、そのうえで彼の「新実在論」において展開される「事実存在〔実存〕Existenz」概念を明らかにすることにある¹。彼自身の研究はそもそもシェリング後期哲学の「神話の哲学」研究をその基礎としているが、それだけにとどまらず認識論や懐疑主義、分析哲学までその幅を広げている。「新実在論」とは彼が現在中心的に論じているテーマのひとつであり、本稿では特にそこで重要な概念として登場する「事実存在」について詳しく論じることとする。「新実在論」とは、彼によれば「ポストモダン以降」の時代における新しい哲学的展開だとされるが、しかしその内実は論者によってさまざまであり統一的な見解があるわけではない²。しかし少なくとも、彼の主張する「新実在論」は、彼自身のシェリング研究の延長線上にあるものと理解できる。彼の問題意識は「世界Welt」と「事実存在Existenz」をめぐる問いに収斂される。これはまさに彼がシェリング研究を通じてつかんだ問いであり、その全面的な展開が、現在の彼の議論に繋がっていると考えられる。

本論文ではまず彼のシェリング理解について検討し、そこで提示される「世界とは何であるか？」という問いがいかなる意味を持つのかを明らかにする。さらに、彼の新しい理論展開を示した『なぜ世界は存在しないのかWarum es die Welt nicht gibt』（以下『世界』）においてどのようにその問いが「新実在論」と結びつくのかを見る。そのうえで、『新実在論Der Neue Realismus』所収の彼の論文である「實在論的に考えられた事実存在」（以下『事実存在論文』）において、とりわけ「事実存在」という概念によって特徴付けられる彼の「新実在論」の構想がどのような哲学的プロジェクトであるのかを明らかにしたい。

1. 「世界」という問題設定

ガブリエルは『神話における人間Der Mensch im Mythos』（以下『神話』）において、後期シェリングの「神話の哲学」を中心に議論を展開している。その序論でまっさきに挙げられる問いは、「世界とは何であるか？」[DMIM:1]という問いである。この問い自体はシェリングの初期思想から一貫しており、西洋形而上学へのシェリングの取り組み（あるいは対決）の原動力となった、しかも今日にも通じる問いだと捉えられている。

シェリングがその〔思想の〕開始初期から集中して取り組み、彼を西洋形而上学の伝統全体への絶え間ない取り組みへと駆り立てた問いは、〔…〕従前どおり非常にアクチュアルである。[DMIM:1]

もちろん、ガブリエルが『神話』において展開する議論は、シェリングの「神話の哲学」の解釈を目的としているから、その文脈から切り離して議論することは適切ではない。しかしながら、「世界とは何であるか？」という問いをシェリング哲学の課題として取り上げ、それが今日的意義のあるものだと示す企ては、既に彼のシェリング解釈に内在していたことがここで確認できることは重要である。というのも、この「世界」を巡る問いは『神話』以

外の著書でたびたびくり返されることになり、明らかにガブリエルの思想の中心問題となっているからである³。それがとりわけ『神話』においては、「神話の哲学」解釈によって「西洋形而上学の古典的問題に対するシェリングの答えを詳細に追及すること」[DMIM:1]によって取り組まれているのである。

それでは、ここで言われる「西洋形而上学の古典的問題」とは何を意味しているのだろうか？それはもちろん「世界とは何であるか？」という問いに表われているが、ガブリエルは、それが形而上学において問われる際には、「存在者 Seiende の全体への（換言すれば世界そのものへの）形而上学的な問い」[DMIM:2]であると規定する。すなわち、西洋形而上学における「世界」とは、厳密には「存在者の全体」としての「世界そのもの」を意味しており、西洋形而上学はそうした世界を問題としてきたということが指摘されている。それゆえ、「世界とは何であるか？」という問いに取り組むことで、シェリングはこうしたギリシア以来の西洋形而上学の伝統的な「世界」理解を再検討することになり、ガブリエルはこの点にヘーゲルとの共通性を見出している⁴。

しかしながら、ここでは同時にヘーゲルとの差異も指摘される。それは、シェリングの後期哲学に見られる「絶対的観念論の保留」[DMIM:2]という立場である。ガブリエルは絶対的観念論の特徴を、存在者の全体を「総体性」として把握する点に見ており、絶対的観念論に距離を置くシェリングの立場を次のように指摘する。

シェリングはヘーゲルとは違って、理性の二重化された外部を考慮に入れている。まず一方で、世界の事実存在という純粹事実 Faktum は存在の概念へは還元できない。理性についての事実存在は諸個別物あるいはわれわれのような理性的存在者 Wesen についての事実存在と同様に、概念には還元できない。他方で、理性の事実存在を自らにとって透けて見えるようにすることは理性の歴史に属しており、それはカントの理性批判において模範的に遂行された。その際に理性は精神が自身の事実存在を超越 Transzendenz することを発見し、そのことは、存在 Sein を超えて、すなわち古典的意味において超越的である絶対的精神への展望を開くのである。[DMIM:2]

ここでは、二つの意味で「事実存在」が理性の外部で設定されることになる。つまり、一つ目の意味では、事実存在が「概念へと還元不可能であること」により理性の外部に置かれている。この場合は事実存在が概念へと還元できないことから、その把握不可能性を「外部」としている。二つ目の意味では、理性の歴史においても、精神自身が自己の事実存在を超越することにより、理性の外部へと置かれている。この場合は事実存在を「理性の歴史」において把握しようとするが、それが精神の自己超越の過程においては、既に超越されてしまったものとししか示せないために、もはや「事実存在」ではなくなってしまうことを「外部」としている。いずれにせよ、ここでは理性にとって事実存在はつねに「外部」であり、把握することはできない。つまり理性の「限界」を理性の外部に設定している。この点でまさにシェリングはヘーゲルと立場を異にする。

これによってシェリングの後期哲学は、絶対的なものについての別の偉大な哲学、ヘーゲル哲学と対決することになる。ヘーゲル哲学は、無限なものあるいは絶対的なものを次のようなものとして理解する。つまり、もはや限界を外へともたずに自らを自ら自身のうちで差異化し、それによって確証されいわずにそのように自身の下へ引き返すものである。[DMIM:2]

シェリングとヘーゲルの係争点は、まさに「限界」の設定の仕方由来している。シェリングはあくまで理性の外部に「限界」を設定しており、ヘーゲルはその限界が絶対的なものによって乗り越えられるものと考えている。「ヘーゲルが理性のどんな限界も止揚し、絶対的なものを、自らを自ら自身と媒介している総体性として叙述しようとした一方で、後期シェリングは、観念論的理性の流域 Einzugsgebiet が再び限界付けられる必要があると考えた」[DMIM:3] のである。こうした「限界」を巡る問題は、そもそもカントの理性批判に対するそれぞれのリアクションと考えることができる。というのも、「理性の限界を内側から線引きするという試みは、もちろん既にカントが披露した」[DMIM, S.3] からである。しかしながらガブリエルはその試みに問題を見て取る。というのもその試みは、理性そのものを審議にかけ揺さぶるものではなく、「理性の暴走を阻止する」[DMIM, S.3] ために

行われたからである。このことによってむしろ、「理性にとって原理的には決して意のままにされ得ないもの」[DMIM, S.3] について理性の立場から積極的に判断することができるようになる。つまりあくまで理性による把握の立場は揺るがないのである。

もちろん、シェリングも理性そのものを否定しているのではない。というのも、あくまで「理性の限界を内側から線引きする」ことはカントと同時にシェリングもまた試みているからである。しかしながらその試みは、「理性は根本的に他のもの Anderes に依存せざるを得ない」[DMIM, S.3] という主張に繋がっている。つまり先ほども確認したように、理性はつねに自身の「外部」を残しており、まさにそのことによって理性は自身の限界を線引きしているのである。ここで決定的に重要なのは、この理性の外部、すなわち「他のもの〔他者〕」が残されることである。ガブリエルによれば、この他のものこそ、「(いまだ) 完全には、絶対的で思弁的な主体性の自己関係へと埋没して消えることのない在るもの etwas」の余地を理性のうちに残すものなのである。つまりシェリングがカントやヘーゲルに対して取っている距離は、理性による把握の立場や、絶対的観念論の立場との距離を表しており、その際に重要なのは、理性そのものをその外部との関係から問い直す視点をシェリングが提供するということである⁵。『神話』においてそれは「神話」を巡る問題において展開される。しかし『神話』以降の議論においては、問いそのものは変わらず「世界」に向けられているが、理性とその外部の問題は存在論的な「事実存在」概念において検討されることになる。

2. 「世界」の不在と「事実存在」

ガブリエルは「新実在論」という構想を、『なぜ世界は存在しないのか』において詳述している。同書は一貫して「世界は存在しない」という主張に貫かれているが、ここで確認しておくべきは、そこで言われる「世界」の意味と、「存在する」ものとしての「事実存在」の理解である。まずはここで「存在しない」と言われる「世界」についてのガブリエルの論述を確認しよう。

私は本書の中である新しい哲学の根本命題を展開しようと思う。その哲学は、ある単純な根本思想、すなわち世界が存在しないという根本思想を出発点にする。[…] 世界が存在しないという根本命題は、そのほかすべてのものは存在するということを含む。[WARUM, S.9]

ここで「新しい哲学」と言われるのはまさに「ポストモダン以降」の時代の哲学を指しており、「新実在論」の構想を念頭においてのことだが、この引用では二つのこと、すなわち「世界は存在しない」ということと「そのほかすべてのもの〔世界以外〕は存在する」ということが重要である。ここではひとまず確認のみにとどめ、続く論述を見てみよう。

本書の二つ目の根本思想は新実在論である。新実在論は、いわゆる《ポストモダン》以降の時代を特徴付けるひとつの哲学的態度である。[…] したがって新実在論はまずもって、ポストモダン以降の時代に対する名称に他ならない。[WARUM, S.9f]

ガブリエルは同著において、「世界の不在とそれ以外の存在」を「新実在論」というポストモダン以降の哲学的潮流を踏まえて説明しようと試みていることが分かる。既に『神話』でガブリエルが提示した「世界とは何であるか?」という問いに対して、ここでは世界は「存在しないもの」であるという回答が出されていることになる。しかしなぜ、「それ以外」のものは存在し、「世界」は存在しないのであろうか。まさにこの点で、ガブリエルの「世界」と「事実存在」の理解が重要となる。ガブリエルは「形而上学」と「ポストモダン（とりわけ構成主義）」における「世界」理解を次のように説明する。

形而上学は世界全体の理論を展開する試みとして定義されうる。形而上学は、世界が現実性においてどうあ

るのかを記述するもので、世界がどのようにわれわれに現れるか、どのようにわれわれに現象するのかを記述するのではない。[…] それに対してポストモダン、われわれに現象する諸事物のみが存在するのだと反論する。そもそもはやその背後には、いかなる世界や現実性そのものも存在しない。[WARUM, S.10f]

ガブリエルが指摘するように、ポストモダンの主張というのは形而上学の主張の変種にすぎない⁶。というのも、ポストモダンにおける「現実性」が「われわれに現象する」とことと同義だと捉えられる限り、ポストモダンは現実性における諸事物の存在を主張しているからである。つまり「現実性」理解そのものが変わることにより、形而上学とポストモダンは結びつくことになる。それは反対に、ポストモダンが形而上学と同じ問題、すなわち「現実性を一面的にしか把握していない」という問題を抱えることにもなる⁷。ガブリエルは、この両者の問題点を踏まえ、それらの立場と新実在論の立場の違いを次のような例によって示す。

なぜ新実在論が世界へのある新しい態度を必然的に伴うのかを理解するために、われわれはある単純な例を選び取る。アストリートがちょうどソレントにいてヴェスヴィオ火山を見てしていると想定し、他方でわれわれ（つまりあなた、愛すべき読者と私）がちょうどナポリにいて同様にヴェスヴィオ火山を観察しているとする。つまりこのシナリオにおいてヴェスヴィオ火山は存在し、アストリートから（すなわちソレントから）見られたヴェスヴィオ火山とわれわれから（すなわちナポリから）見られた火山が存在する。[WARUM, S.14]

こうした条件設定の下で、まずは形而上学的にこのとき何が存在すると主張されるのかが示される。

形而上学は、このシナリオにおいてはあある唯一の現実的対象すなわちヴェスヴィオ火山が存在すると主張する。この火山はちょうど偶然にもあるときはソレントから、またあるときはナポリから観察されているが、そのことがしかしおそらくほとんど火山を動かすことはあるまい。誰がその火山に関心を持とうと火山にとっては関係が無いのだ。これが形而上学である。[WARUM, S.14]

形而上学の考え方からすれば、唯一の対象すなわち「ヴェスヴィオ火山」そのものしか存在しないことになる。つまり形而上学にとってはこの場合観察者が誰であるのかは問題とならず、現実的な対象である火山そのものの存在だけが主張されるのである。そこでは当然、どの視点からでも見られているのは同じ一つのヴェスヴィオ火山であり、視点に応じてその火山の存在が分けられることは無い。しかし同じ条件設定の下でも、構成主義の立場に立つと次のような主張になる。

それに反して構成主義は、このシナリオにおいて三つの対象が存在すると想定する。つまりアストリートとあなたとわたしにとっての火山が存在する。その背後にはそもそもいかなる対象も存在しないか、われわれがいつか認識することを期待できるような対象が存在しないかのどちらかである。[WARUM, S.14]

形而上学の立場とは異なり、構成主義の立場においては視点の数だけヴェスヴィオ火山が存在することになる。つまり誰によって見られているかが、ヴェスヴィオ火山の存在を変えているのである。それと同時に、構成主義の立場においては観察者のいない存在はそもそも存在せず、つねに誰かの視点に依存してのみ存在が成立するのだから、形而上学の立場で主張されるようなヴェスヴィオ火山「そのもの」というのは存在しないことになる。

こうした形而上学と構成主義の立場を踏まえた上で、ガブリエルはさらに同様の条件下で、「新実在論はそれに反して、このシナリオには少なくとも四つの対象が存在すると想定する」[WARUM, S.14] のだと主張する。そこでまず存在すると言われるのは、以下の四つである。

①ヴェスヴィオ火山

②ソレントから見られたヴェスヴィオ火山

(アストリートの視点)

③ナポリから見られたヴェスヴィオ火山

(あなたの視点)

④ナポリから見られたヴェスヴィオ火山

(私の視点)

この新実在論の主張が、形而上学やポストモダンとどのように異なるのかを確認しよう。まず形而上学と異なるのは、①以外の存在を認める点である。つまり、特定の視点に依存したヴェスヴィオ火山の存在を認めるということである。さらに構成主義と異なるのは、①の存在を認める点である。つまり、特定の視点に依存せず独立している「そのもの」の存在を認めるということである。このことから、新実在論の特徴は、「事実についての思考 *Gedanke* が、われわれがそれについて思案する *nachdenken* 事実と同等の正当性を持って事実存在することを想定する」[WARUM, S.15] 点にあると言われる。つまり新実在論は、形而上学で言われる「そのもの」や構成主義で言われる「観点依存的な対象」もすべて「事実存在」として認めているのである。それゆえ新実在論にとって「世界とは単に見る者無き世界でも単に見る者の世界でもない」[WARUM, S.15] のである。

しかしそれならば、同様に「世界」もまたわれわれが思考しうるものとして事実存在すると認めてよいのではないだろうか？しかしそうした疑問に反論してガブリエルは次のように述べる。

なぜ世界が存在しないのかを理解するためにさしあたり、或るもの *etwas* が存在するということはそもそも何を意味しているのかが理解されねばならない。或るものが世界の内に出現する場合にのみ一般に或るものが存在する。[...] いまや世界それ自体は世界の内に出現しない。少なくとも私は世界それ自体をいまだ見たことがないし、感じたことも味わったこともない。仮にわれわれが世界について思案するとしても、それについてわれわれが思案するところの世界は当然そこにおいてわれわれが思案する世界と同一ではない。[WARUM, S.22]

ここでまさしく、ガブリエルのいう「存在すること」の意味が問題となってくる。ここでは「在るもの」が存在することは「世界」のうちにあることを意味しているとされる。ここでの世界がまさに前節の最後で述べられた「存在者の全体」としての世界であることが分かる。シェリングが否定した「存在者の全体」としての世界こそ、ここでガブリエルによって否定されている「世界の存在」なのである。つまり、「世界」のうちに生じるもののみが存在すると言われるとき、そこで生じるものを存在たらしめる「世界それ自体」は、「世界」のうちに生じてはいないのだから、「世界」は存在しないことになる。ガブリエルは「事実についての思考」も事実存在することを認めているが、既に見たように「存在者の全体」や「そのもの」としての世界理解はガブリエルには受け入れられない想定であるので、それはもはや「事実についての思考」ではない。このことから、「世界は存在しない」とされるのである⁸。

ガブリエルはこうした論証により、シェリング解釈から引き出した「世界とは何であるか」という問いに対して、シェリングと同じく「存在者の全体」としての世界理解を否定することで答えようとしている。しかしガブリエルの論証は、もう一つの大きなテーマを設定することになる。それは、「世界以外」としての「事実存在」の成立に関する問いである。すなわち、「事実存在とは何であるか」という問いが、世界の不在を論証した後のガブリエルの新たな問いとなるのである。「したがって、そこにはまったくいつになってもどこにも見る者の存在しない世界においてどうやって見る者が存在しうるのかが説明されなければならない。この課題は、本書で新しい存在論 *Ontologie* の導入により解決される。[...] 存在論において最後には事実存在の意味が問題になる」[WARUM, S.16]⁹。

3. 『新実在論』におけるガブリエルの主張—「実在論」の区別

「世界の不在」と「事実存在の存在」を巡る問いを「存在論」の領域で考察する必要があることが、前節までで明らかになった。またそこでの「存在論」とはポストモダン以降の時代を表す「新しい存在論」である「新実在論」を意味している。『世界』ではあくまで「存在しない」世界との対比で「存在する」ものとして「事実存在」について語られていた。しかし『新実在論』においては「世界」というテーマは背景に退き、実在論自体の詳しい理解と「事実存在」というテーマが代わりに強調される。ガブリエルは『新実在論』全体の序論において、各論文の解説をするにあたり、全体を概観して次のように「新実在論」の特徴について述べている。

新実在論の眼目は次の点に見られる。新実在論は、伝統的に実在論の立場に有利な材料を与えていた、疑う余地のない現実性を、はじめから《外的世界》や《自然》と同一視はしないのである。[ERG, S.9f]

ここで挙げられる「新実在論」の特徴は、「現実性」を「外的世界」や「自然」と同一視しないという点にある。それぞれの概念の厳密な定義は差し当たり省くが、ここで重要なのは、これまでの実在論に対して有利に働いていた「現実性」を、「外的世界」や「自然」といった事物といったん切り離す点である。ここで「外的世界」や「自然」といった言葉で想定されているのは、自然主義や物理主義、自然科学的な世界理解のことである¹⁰。つまりガブリエルは、そうした物質中心主義的な現実理解に対して懐疑的であり、いったん距離を置こうとしているのである。これは単純な対立関係から言えば反実在論の議論を採用しているようにも見えるが、しかしながらここでいわれる「新実在論」の眼目は、「実在論」自体をより洗練させることを意図しており、一般に対立させられる「観念論／実在論」や「認識論／存在論」といった区別をより広い実在論の側で捉えなおそうとするものである。そしてこの論文はまさにその点を「事実存在」の検討から明らかにするものであり、「新実在論」という試みの基本線を示している。

さて、ガブリエルはその試みを展開する際に、まず「実在論」と呼ばれるものがいかなる議論であるかを、対立概念としての「反実在論」の領域を示すことで明らかにしようとする。彼はとりわけ「構成主義」と「観念論」を取り上げ、「反実在論」に属するものとして検討を重ねていく¹¹。ここでの「反実在論」の特徴は次のように述べられる。

したがって反実在論の決まり文句は次のように述べる。それが理解されるが「故に」あるいは「そのことによって」のみ、対象領域に起こっているすべてのことが事実存在するのだということが少なくともある対象領域には妥当する〔ということの意味する〕。[ERG, S.172]

ここで言われる対象領域とは、例えば「色」など特定の事物の種別のことであり、反実在論はそれら対象が「理解されるか否か」という点に事実存在の可否を求めている。つまり反実在論による対象の説明は、その対象をわれわれが特定の仕方ですべて「理解」したとき、初めて「事実存在」と呼ぶにふさわしいものとして認めるというものである。「色、意味、心情や価値などは反実在論的構成のための現代的候補者である。というのもそれらは、自身が特定の仕方ですべて理解されるときのみ事実存在するのだという印象を与えるからである」[ERG, S.171]。この場合には当然、われわれに特定の仕方ですべて「理解されない」ものは「事実存在」しないものとして扱われる¹²。しかしガブリエルは、こうした「反実在論」的な仕方では、例えば「精神」や「モラル」といったものはどのような扱いになるのか、そしておそらくそれらが「事実存在」しないものとして扱われるのではないかと危惧する。この点をまさに「実在論」と「反実在論」の議論の核だとして、今まで述べてきた反実在論とは異なる、「存在論的実在論」の定式化を試みる。この「存在論的実在論」と、対となる「(存在論的) 反実在論」は次のように区別される。

存在論的実在論は存在論的実在論とは違って、或るもの etwas が事実存在することが何を意味するかを完全に理解するためには、われわれが一般に事実存在の理解を超えて何も理解する必要がないということを主

張する。[ERG, S.174]

「(存在論的) 反實在論」の特徴は、何かについてそれが特定の仕方では「理解されない」のであれば「事実存在しない」ものとして扱う点にあった。それに対して「存在論的實在論」は、或るものを「事実存在」として扱う際には、それが何であるかは問題ではなく、われわれの「理解」に依存していないと主張している。つまりわれわれは或るものについてそれが何であるかを「理解」していなくても、それを「事実存在」として扱うことが可能とされる点に、「存在論的實在論」の特徴がある。

しかし以上の区別から、「(存在論的) 反實在論」と「存在論的實在論」がまったく相容れないとする議論は展開されない¹³。ガブリエルはむしろ、「存在論的實在論」が「(存在論的) 反實在論」を含みこむ形で両立しうるものだと、その点に「存在論的實在論」の重要な点があると考えている。

存在論的實在論の要点は、實在論的に論じられなければならない対象領域と、反實在論的に論じられなければならない対象領域との差異を、自身の側で、實在論的对象領域が實在論的にとどまることだと理解する点にある。[ebd.]

このように、「實在論 / 反實在論」の区別は「対象領域」の差異で表されるが、「存在論的實在論」は反實在論の対象領域も含んだうえで、両者の区別は単に「實在論的对象領域」を反實在論の対象領域まで広げずに「實在論的」なままにとどめた結果であると理解するのである。こうした議論から、ガブリエルの主張する「存在論的實在論」は、反實在論の基盤ともなるような實在論的对象領域を確保する試みだと言える。つまり「厳密に言えば、存在論的實在論は、局所的反實在論が支持できる場合には真でなければならない」[ebd.] のである。

4. 「事実存在」とは何か

これまでの考察から實在論と反實在論が「存在論的實在論」のもとでそれぞれの位置付けを持つことが明らかとなった。しかし次に問題となるのは、ここで反實在論の基盤にあるとされた實在論的对象領域における「事実存在」とはなんであるか、ということである。存在論的實在論で扱われる「事実存在」が「理解」を必要しないと言われる際、われわれはこの実存をどのようなものとして扱わなければならないのか。その問いは、「事実存在とは何か」を問うことによって展開される。『事実存在論文』第一節「事実存在とは何か？ Was ist Existenz?」に入る直前でガブリエルは次のような問いを立てる。

問いはいまや、事実存在をまたただ、われわれが理解できなければ何も存在しなかったとわれわれが想定するという仕方でのみわれわれの理解に従属させることがないように、われわれがどのように「事実存在」を理解しなければならないか、ということである。[ERG, S.177]

「反實在論」が扱う「事実存在」は、それが「理解される」かぎりで実存と認められるものであった。つまりわれわれの理解に従属することでしか「事実存在」しえないのである。しかしいまや、「存在論的實在論」の立場から「事実存在」を扱おうとすると、反實在論とは違った仕方では「事実存在」が扱われねばならない¹⁴。問題は、存在論的實在論にとっての「実存とは何か」を明らかにすることにある。ガブリエルはこの問いを決定的な問いと考え、これを明らかにすることで「私がその際に存在論 *Ontologie* のもとで、何が事実存在とそれに関連する概念を意味しているのかという問いの体系的返答を理解する」[ebd.] ことを目指すのである。

ガブリエルは哲学史をたどりながら「事実存在」の問題を概観した後、現代では「存在論的反實在論」が優勢であり、それに対抗する「古い形而上学的實在論」は乗り越えられていると分析する。そこで古い形而上学的實在論は、次のように定義される。

われわれは古い形而上学的實在論を明確に次のようなテーゼとして述べて定義する。それは、解釈上普遍に特権を有するタイプの最大限様態的に強固な事実が存在するがゆえに、われわれは存在論的實在論を支持すべきなのだというテーゼである。[ERG, S.190]

こうした實在論においては、「特定」の事実により「特権」的地位が与えられると理解される。そしてそうした事実を認めることを、すぐさま「存在論的實在論」を支持することの理由としてしまう。つまり、われわれに「理解される」こととは独立の特権的存在があると認めることになる。この点に「存在論的反實在論」は反論を企てており、ガブリエル自身もそのことは正当だと考えている。

そのことに対して存在論的反實在論が次のように反論するのは正しい。それによっていまや再び、特定のタイプの特定の事実階級や対象へ根拠なく存在論的に特権的地位が与えられているのだと。[ebd.]

こうしていまや、「實在論 / 反實在論」の区別は、「古い形而上学的實在論 / 存在論的反實在論」の区別として展開される。われわれの理解によっては揺らぐことのない「強固な」事実を特権化することで「存在論的實在論」を支持するという議論を、存在論的反實在論は否定する。というのも、そもそも存在論的反實在論は「理解される」ことが事実存在の条件であり、それはまた「理解される」点で存在論的には事実間での優劣がつかないことも意味している。それがどのような理解であっても、理解自体の間で優劣は存在せずそれぞれの理解として成立している。その意味で、古い形而上学的實在論による事実の特権化は、存在論的反實在論の立場からすれば「根拠なく」特定の事実が特権化されていることになるのである。

しかし以上の立場では、結局両者はお互いに相容れないまま二者択一の関係として残ってしまう。既に見たように「新實在論」とは、「實在論 / 反實在論」の二者択一関係を、實在論の側から捉えなおすことで局所的に反實在論を維持したまま實在論を展開する試みであった。ガブリエルは「新實在論の存在論への適用」という形でその試みを展開する。

それに対して私は新實在論の存在論への適用を提案する。私自身は「新實在論」を一般に次のような事実の体系的承認であると理解している。それは、われわれの實在的なものについての思考がまさしくあらゆる他のものと同様に實在的 real であるという事実である。實在性は、或るものが最大限強固な事実のうちに埋め込まれているかどうかには依存せず、単に事実に依存するのである。こうした根本理念を存在論へ適用すると、私の考えでは事実存在を實在論的に考える新しい可能性が明らかになる。[ERG, S.192]

ここでガブリエルは「新實在論」がある事実を体系的に承認するものであると述べる。その事実とは、「思考 *Gedanke*」が實在的 real という事実である。この「思考を實在的とする」という立場は、対立していた「實在論 / 反實在論」のどちらとも異なる立場を提案している。というのも「思考」が他のものと同様に「實在的」であるという立場は、特定の事実の特権化（古い形而上学的實在論）とも、われわれの「理解」にのみ基づいて全体へと敷衍される「事実存在」理解（存在論的反實在論）とも異なる。實在性の一面化が古い形而上学的實在論と存在論的反實在論の特徴だとすれば、その両者の一面性を廃棄した立場が「新實在論」の立場ということになる。つまり「こうした論述の要点は、最大限様態的に強固に特徴付けられなければならない対象領域があるのと同じく、それが当てはまらない対象領域もあるということを承認する存在論的實在論にある」[ERG, S.193] ののである。そして、そうした存在論的實在論、「新實在論」における「事実存在」は、いまや次のように理解されることになる。

私は「事実存在」をいまや適切に「ある意義領野において現象するもの」として定義する：事実存在するのはそこにあり、そこでは定在の場所表記が、或るものが生じる意義領野を示している。ひとつの意義領野で現象するものはもちろん、ひとりの人格やさらに匿名の宇宙的なあるいは超越論的な意識という意味で誰にでも必然的に現象するものではない。事実存在しているものはそれゆえ、それがあつた時空的位置を占める（それ

はまた事実存在しているすべてのものには妥当しない) ことによって個体化されておらず、むしろそれが特定の仕方と与えられうることによって個体化されている。[ERG, S.196]

ガブリエルはこの直前でフレーゲの「意味 Bedeutung」と「意義 Sinn」の区別に言及し、「その対象が特定の仕方と現象することによって個体化される対象領域」[ebd.]を「意義領野 Sinnfeld」と呼ぶ。「意義領野」は「意味」とは異なり、或る同一の対象の指示ではなく表現の仕方とで区別される。例えば「アルプス」(同一の対象)が「山脈」であつたり、たんに「原子の集合体」であるといった形で表現されることが可能である。さらにここでは、そういった複数の表現は対象領域の複数性によって可能となる。ある対象が「特定の仕方」で「現象する」ことは、その対象領域すなわち「意義領野」によって決定されている¹⁵。こうした形で現象するに至ったものが、新實在論において扱われるところの「事実存在」なのである。

意義領野存在論はしたがって存在論的モチーフを引き受け、事実存在を本来的特性としてではなく、或るものがその場において現象するような意義領野の特性として再構成する。このことはまた世界が存在しないという私のテーゼの背後にある本質的モチーフでもある。[ebd.]

ガブリエルが「存在論的モチーフ」というのは、「対象の区別」に関わる「本来的特性の概念」の探求にあつたが、ここで重要なのは、事実存在をわれわれの「理解」に依存して扱う「存在論的反實在論」から見られた特性をも、「意義領野存在論」(新實在論、存在論的實在論)の立場は局所的に認めていることである。それゆえ、存在論的モチーフを引き受けながらも、事実存在を包括的にではなく対象が現象するような「意義領野」の特性として扱うことは、「新實在論」において可能である。これはつまり、個々それぞれの対象領域における現象をそれぞれ「事実存在」として扱うことであり、これまで見てきた「實在論/反實在論」の欠点を補う試みであると言える。以上の試みから明らかになる「新實在論」の試みについて、ガブリエルは次のようにまとめている。

ここで素描された立場はしたがって、全包括的領域を想定せずに出てくるある存在論的實在論に達する。したがって實在論と多元論は両立する。とりわけ新しい存在論的實在論は局所的反實在論的策略のための余地を残すが、しかしその事実存在の概念そのものへの拡張は禁止する。[ERG, S.198]

これまでの「實在論/反實在論」という区別の下で続けられてきた議論は、どちらもその対象領域を全体へと適用することで「全包括的領域」を目指すために二者択一の状況にさらされてきた。しかしガブリエルによって展開された「存在論的實在論」、すなわち「新實在論」の立場は、そうした二者択一の状況を回避するために、「全包括的領域を想定せず」、そのことによって、古い形而上学的想定である特定の事実の特権化や、反實在論の「理解」一般化のどちらとも違う形で「事実存在」を扱うことになる。そこで成立するのは、一部では反實在論からも「事実存在」と認められる対象領域を残しつつ、「事実存在という概念そのもの」に関しては反實在論的な扱いを退け、あくまで「實在論」の枠組みで、すなわちわれわれによって「理解される」ことがなくても対象を「事実存在」として認める立場である。この立場こそ、ガブリエルが「(新しい) 存在論的實在論」、「新實在論」と呼ぶところの立場である。

おわりに

『神話』におけるガブリエルの意図は、後期シェリングの「神話の哲学」解釈にある。しかしながら、「世界とは何であるか?」というシェリングの問題設定をガブリエルが重要視し、初期からシェリングを貫いている西洋形而上学の古典的な問題だと評価することは、ドイツ観念論における課題の設定がまだアクチュアリティを持つことを示す試みでもあつた。ここで世界把握の可能性としての「理性の外部」の問題をシェリングが展開していることはドイツ観念論での彼の立場を特徴付けており、ガブリエルはそこに着目し、シェリングの「自己意識の歴史」構

想から説明を試みている。その結果、「シェリング哲学」の観点から「全体としての世界」を否定することが、あくまでも存在論的に「事実存在」を擁護する論証に接続されることが明らかとなった。

さらにガブリエル自身の「世界はなぜ存在しないのか」という主張は、あくまで「全体としての世界」の否定によって「それ以外のすべてのものの存在」への転換を表しており、そこで初めて存在論の領域で議論が進められることとなる。ガブリエルが「新実在論」の流れにおいて構想するのは、古い形而上学ともポストモダンにおける反実在論とも異なる「新しい実在論」である。そこでは特に「事実存在」と、事実存在が現象する「意義領野」との関係が問題となっていた。ガブリエルが「全体としての世界」を否定する際には、この「意義領野」の多元性を保証するという意図がある。つまりすべての意義領野を統括するような唯一のメタ的な存在（たとえば世界）という想定を廃棄することで、多元性の余地を残している。「実在論／反実在論」は一見すると相容れない対立関係のように思えるが、ガブリエルの分析によれば「存在論的反実在論」として反実在論も存在論の範疇に入りうるのである。その上で、存在論的反実在論の根底に「存在論的実在論」すなわち「新しい存在論」、「新実在論」を据えるのである。本稿では、ガブリエルの構想がまさに「事実存在」における多元的な現実性理解を中心とした存在論であり、それがシェリング解釈を通じたドイツ観念論の復権まで射程に入れた現在の彼のメインテーマであることを明らかにした。

資料

『なぜ世界は存在しないのか』注釈一部抜粋翻訳 [WARUM, S.264ff]。ガブリエルは自身の使う用語の意味を次のように規定しており、内容を理解する上で助けとなるため、一部を抜粋し載せる。

- 「二元論 Dualismus」：まさに二つの実体 Substanz すなわち二種類の対象が存在するという見解。とりわけ、思惟 Denken と物質 Materie は完全に異なるという想定。
- 「現象 Erscheinung」：「現象」は「出現 Vorkommen」あるいは「生起 Vorkommnis」の一般的表現を示す。諸現象は数のような抽象的形象あるいは四次元空間的事物のような具体的で物質的形象でありうる。
- 「事実存在 Existenz」：或るもの etwas が意義領野において現象しているという、意義領野の特性。
- 「実存主義 Existenzialismus」：人間の実存 Existenz の探求。
- 「事実性 Faktizität」：或るもの etwas がそもそも存在するという状況 Umstand。
- 「対象 Gegenstand」：それについてわれわれは真理区別可能な wahrheitsfähig 思考 Gedanke を伴って思案する nachdenken。すべての対象が四次元空間的事物なのではない。また数や夢の形象も形式的意味で対象である。
- 「対象領域 Gegenstandsbereich」：特定の種類の対象を含む領域であり、そこではこうした対象同士を結びつける規則が確定している。
- 「否定的存在論の主要命題」：世界は存在しない。
- 「肯定的存在論の第一主要命題」：必然的に無限に多くの意義領野が存在する。
- 「肯定的存在論の第二主要命題」：各々の意義領野は対象である。われわれは意義領野をすべて把握することはできないけれども、各々の意義領野について思案 nachdenken できる。
- 「誤謬理論 Irrtumstheorie」：ある発言領域 Redebereich の体系的誤謬を説明し、それを欠点をもつ想定シリーズへ還元する理論。
- 「構成主義 Konstruktivismus」：そもそもいかなる事実 Faktum や事実そのもの Tatsache an sich も存在せず、われわれはむしろあらゆる事実 Tatsache をわれわれの多様な会話 Diskurs や学問的方法によってのみ構成するのだとする各々の理論の根本的想定。
- 「物質主義〔唯物論〕 Materialismus」：あらゆる事実存在するもの Existierende が物質的であるという主張。
- 「形而上学 Metaphysik」：世界全体の理論を展開しようという企て。
- 「一元論 Monismus」：ある唯一の実体 Substanz、すなわちあらゆる自分以外の対象を自らのうちに含む超対象 Supergegenstand の想定。
- 「自然主義 Naturalismus」：ただ自然のみが存在し自然は宇宙、すなわち自然科学の対象領域と同一であるという主張。
- 「唯名論 Nominalismus」：われわれの概念とカテゴリーが世界の構造や区分などを記述や模写するのではなく、われわれがわれわれの環境と自分自身によって形成するすべての概念はわれわれの生存可能性を獲得するためにわれわれに企てられた普遍化に過ぎないというテーゼ。
- 「存在論 Ontologie」：伝統的には存在者 Seiende についての理論の表現。本書において《存在論》は《事実存在》の意味の分

析として理解される。

- 「物理主義 Physikalismus」：すべての事実存在するもの Existierende が宇宙の中にありそれゆえ物理学によって探求されうるという想定。
- 「多元論 Pluralismus」：多くの（少なくとも明らかに二つ以上の）実体 Substanz が存在する
- 「実在論 Realismus」：われわれがそもそも或るもの etwas を認識するとき、われわれが事物それ自体 Ding an sich を認識しているというテーゼ。
- 「新実在論 Neuer Realismus」：第一に、われわれが事物それ自体 Ding an sich や事実それ自体 Tatsache an sich を認識でき、第二に事物それ自体や事実それ自体はある唯一の対象領域には属さないという二重のテーゼ。
- 「反省 Reflexion」：思案についての思案 das Nachdenken über das Nachdenken。
- 「登録〔感知〕 Registratur」：情報処理や知識獲得という目的のための前提、媒体、方法そして物質的なものの選抜 Auswahl。
- 「宗教 Religion」：無限なもの、端的に意のままにならないものや不変なものからわれわれ自身への帰還 Rückkehr。そこでわれわれが完全に喪失しないことが問題になる。
- 「意義 Sinn」：対象が現象する仕方。
- 「意義領域 Sinnfelder」：そもそも或るものが現象する場所 Ort。
- 「意義領域存在論 Sinnfeldontologie」：そこに或るものが現象する意義領域が存在するときのみ或るものは存在し、無 nichts は存在しないという主張。事実存在 Existenz = ある意義領域における現象。
- 「実体 Substanz」：特性 Eigenschaft の担い手。
- 「超思考 Supergedanke」：世界全体と自分自身について同時に思案 nachdenken する思考 Gedanke。
- 「超対象 Supergegenstand」：あらゆる可能な特性 Eigenschaft をもつ一つの対象。
- 「事実 Tatsache」：或るもの etwas について真であるところの或るもの Etwas。
- 「宇宙 Universum」：自然科学の実験的に推論可能な対象領域。
- 「世界 Welt」：あらゆる意義領域 Sinnfeld の意義領域、そこにおいてあらゆる別の意義領域が現象する意義領域。

略号

マルクス・ガブリエルの著作からの引用は略号を用い、頁数を記した。

DMIM: Gabriel, M., *Der Mensch im Mythos. Untersuchungen über Ontologie, Anthropologie und Selbstbewußtseinsgeschichte in Schellings Philosophie der Mythologie*, Berlin&New York: Walter de Gruyter, 2006.

ERG: Gabriel, M., Existenz, realistisch gedacht. In: *Der Neue Realismus*, Berlin: Suhrkamp, 2014, pp.171-199.

WARUM: Gabriel, M., *Warum es die Welt nicht gibt*, Berlin: Ullstein, 2013.

参考文献

長島隆、「Weltalter の研究とマルクス・ガブリエルのシェリング研究」、東洋大学国際哲学研究センター編『国際哲学研究別冊 5 哲学と宗教—シェリング Weltalter を基盤として』、2014 年、142-160 頁。

Ferraris, M., *Manifest des neuen Realismus*, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 2014.

Gabriel, M., *Die Erkenntnis der Welt - Eine Einführung in die Erkenntnistheorie*, Verlag Karl Alber, Freiburg/München, 2012.

注

- 1 本稿では Existenz を一貫して「事実存在」と訳した。というのも「実存」という訳語には、ハイデガーが示したような、「人間」の存在構造という意味があり、本報告で扱う Existenz は必ずしも人間に限定されるものではないので、誤解を防ぐために訳語としては区別した。しかしながら、ガブリエル自身にそういった「人間」の存在構造を、一般的な事物にまで拡張する意図があるかどうかに関しては今後更なる研究が必要であると思われる。
- 2 この点に関してモーリス・フェラーリは、あくまで「宣言」という立場をとっている。すなわち、こうした理論を彼らが新しく主張しているのではなく、むしろ現在進行形で行われている議論を総称してそのように名づける一種の時代診断を「宣言」という言葉で表しているのである。それはガブリエルが「ポストモダン以降」の「新しい哲学」の根本性格だとしていることとも符合する [Ferraris 2014:13f.]。
- 3 ガブリエルは『神話』において、とりわけ「自然主義と宗教」の問題に対するシェリング哲学のアクチュアリティを主張している。ガブリエルはここでハーバーマスを念頭においているが、『世界』においても再度取り上げられる。特に「自然主義」に対してガブリエルは、それが自然科学で扱えるもののみを「事実存在する existieren」ものと見なし、ほかをすべて「幻想 Illusion」として切り捨ててしまう点を批判する [WARUM, S.135f.]。
- 4 ここでガブリエルは、この問いに対するシェリングの答えを検討する際には、当然ながらドイツ観念論の問題だけでなく、

ギリシア形而上学まで射程に入れる必要があると指摘する。というのも、シェリングとヘーゲルの両者が、ギリシア哲学においては「存在神学 *Ontotheologie*」として形而上学のパラダイムが定式化されたという理解をしているとされるからである。「シェリングは、形而上学のパラダイムがそこにおいて存在神学として定式化されたギリシア形而上学の伝統のうちに加わるが、彼はヘーゲルと同様にそのパラダイムに従っている」[DMIM, S.2]。

- 5 ガブリエルによるシェリング解釈とその影響に関しては[長島 2014]が詳しい。そこではシェリング研究における解釈史だけでなく、ガブリエルのその後の懐疑論や認識論、分析哲学といった思想展開も含めて概要が示されている。同巻にはさらにガブリエルの二つの講演原稿や、その後開催されたシンポジウムの原稿が収められており、全体としてシェリングの *Weltalter* にフォーカスをあてた構成となっている。長島によるガブリエルの紹介は[長島 2014:155]を参照。
- 6 [WARUM, S.11]
- 7 ガブリエルは次のように両者の問題点を指摘している。「形而上学と構成主義は同様に、現実性を一面的に見る者無き世界として理解するか、さもなくば同様に一面的に見る者の世界として理解することによって、それ[新実在論]に対して、現実性の根拠なき簡略化につまづき挫折している」[WARUM, S.15]。
- 8 ここでは明らかに二つの意味での「世界」が問題となっている。つまり個別に想定された世界とそれらをまとめた全体としての世界である。ここで否定されるのは後者の世界の存在であるが、ガブリエルは前者の意味での世界の存在を否定していない。しかしながら、この世界が個別に想定されたものだとしても、既に例で見た新実在論において認められる四つの存在のいずれにこの世界が該当するのかが問題として残る。というのも、例における①もまた何者かの視点に依存して成立した存在ではないかという反論が可能だからである。例における①の位置付けの問題と多元論の問題はさらに論じる必要があるが、ここでは詳しく論じることはできない。
- 9 ガブリエルはここで物理学や自然科学を念頭において議論を進めている。というのも、こうした「存在」とは現代の多くの人々にとっては「物質的」であることを意味し、それらを扱う物理学や自然科学こそこうした課題にふさわしいのではないかという反論を想定しているのである。しかしガブリエルはそうした態度に距離をとり、より広い意味での「存在」を問題にしている。自然科学的な世界理解との対決は各所に見られるが、例えば[WARUM, S.42]を参照。
- 10 「自然主義」、「唯物論[物質主義]」、「物理主義」のそれぞれをガブリエルは既に『世界』において問題にしている。これらに共通するのは、自然科学によって把握可能なものしか認めないという現実の一元化の問題を抱えているということである。詳しい定義は資料を参考にしてもらいたいが、ガブリエルはたびたび自然科学的な現実理解や世界理解に対して批判を行っている。例えば[WARUM, S.27ff]、[WARUM, S.127ff]を参照。
- 11 重要なのは、ここで両者が反実在論に属するからと言って、すべての観念論、構成主義が一貫して反実在論的だとは言われていないことである。ガブリエルは観念論、構成主義の中にもさまざまな議論があると考えており、むしろ後述する彼の理解を参照すれば、従来観念論や構成主義と呼ばれてきたものが、その対象領域の変更を迫られる可能性がある。「観念論と構成主義は反実在論と結び付けられる。しかし第一に、両者のあらゆる種類が反実在論的なのではないし、第二に、観念論と構成主義のいずれの形式も一貫して広範囲で反実在論的ではありえない」[ERG, S.171]。
- 12 ガブリエルは反実在論の言う「理解する *verstehen*」が、「登録する、感知する *registrieren*」という意味で使われていると指摘する。これは例えば「脳神経構成主義」の主張にも表れており、脳内の電気信号のデータが特定の事象を「理解する」ことに移し変えられているとしている。さらに言えば、ここで学問対象として扱われているのは理解される「対象」ではなく理解する側の脳機能であり、同時にこの脳機能が探求の対象となった場合にも、探求されるのは脳そのものではなく脳を取り巻く「状態」である点が「反実在論」として挙げられる理由となっている。
- 13 というのも、ガブリエルは反実在論が扱う「事実存在」に関しても、その意義を認めているからである。「その際には、まさにただわれわれが反実在論的に理解しなければならない対象領域において出現する場合にのみ事実存在する多くのものが、事実存在することに注意を向ける必要がある」[ERG, S.174]。
- 14 ここでは「理解する *verstehen*」という語がかなり多義的に使われている。つまり、反実在論における「理解」と一般的な意味での「理解」の水準を区別して解釈する必要がある。反実在論における「理解」については註 11 を参照のこと。ここで重要なのは、「事実存在」が反実在論的な意味で「理解」されなくても、事実存在として成立するという点である。
- 15 より分かりやすい例として、ガブリエルは「魔女」や「ユニコーン」の存在を挙げる。つまり、物語の中における魔女やユニコーンの存在を認めるときには、「物語」が「意義領野」に該当し、その意義領野たる物語の中で「魔女」や「ユニコーン」はたしかに存在する、という議論である [WARUM, S.115ff]。

キーワード

新実在論、存在論、事実存在〔実存〕、世界